

2021年6月20日聖霊降臨後第4主日説教

ヨブ記 38章1節-11節、16節-18節

コリントの信徒への手紙二 5章14節-21節

マルコによる福音書 4章35節-41節（5章1節-20節）

本日の夜、聖職会がリモートで開催されます。主題は、緊急事態宣言解除後の礼拝再開についてです。すべてが元通りにはならないと思いますが、皆さまと一緒に礼拝堂で祈りをささげる日も近いと思います。季節ごとに発行されている「聖鐘」から臨時号が発行される予定です。100字と短いのですが、皆さまのお声を交換できればと思います。また、6月から週報を作成し聖歌5曲を、オルガニストの方々に選曲していただき掲載しています。まだ歌うことができなくても、心を合わせて礼拝再開の準備ができればと思います。

さて、本日の旧約日課は「ヨブ記」です。「ヨブ記」は、現代でも主題となるような、様々な神学的あるいは哲学的なテーマが盛り込まれている文書です。それらは、主なる神様は善に報い悪を罰するという因果応報の考え方、主なる神様は絶対に正しいという神義論、人間に与えられた自由意志・理性と信仰とのかかわり、主なる神様は信仰者の声に応えるのかという神の沈黙などです。

このような主題の多い「ヨブ記」を、簡潔にまとめてしまうのはよくないかもしれませんが、あえてまとめると以下のようになると思います。主人公のヨブは、「旧約聖書」の中で、信仰的にも人格的にも最も模範的な人物でしたが、自分に何の落ち度もないにもかかわらず、度重なる災難に会い、悲しみの底に突き落とされます。それでも主なる神様に信頼を置こうとするヨブですが、そのような自分の状況を、友人たちによって因果応報の考え方で、認識され了解されそうになります。ヨブはそれらに対して抵抗します。そしてヨブの最後の望みは、33章35節「どうか、わたしの言うことを聞いてください。見よ、わたしはここに署名する。全能者よ、答えてください」、主なる神様から直接答えをもらうことでした。

本日の個所は、「ヨブ記」の終わりの方で、主なる神様が、答えを求めるヨブに語りかける個所です。主なる神様は、厳しすぎるほどの言葉をかけています。しかし、そこに「ヨブ記」が示す、もっとも正しい人間のあり方があります。それは、主なる神様と対面することができれば、それだけで最高の幸福であるということです。それ以外にこの地上で得られた、ありとあらゆるもの、物質であれ、精神的なものであれ、見えるものであれ、見えないものであれ、それらは、主なる神様と出会うことに比べれば、何の価値もないということです。

「ヨブ記」の42章5節から6節には、「あなたのことを、耳にしてはおりました。しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます。それゆえ、わたしは塵と灰の上に伏し自分を退け、悔い改めます。」とあります。これがヨブの最後の言葉です。ヨブは、人間のあらゆる思いを超えて、ただ神と出会うことが実現した時、

それまでの自分の主張や考えを一切捨てて、そのことにもっとも捨てがたい幸福があることを知りました。それは、天地創造の初めにあった幸福です。アダムと女（エバ）が、自ら捨ててしまった幸福でした。しかし、すべてを失ってしまっても、その幸福を得たがゆえに、ヨブは納得したのでした。

このようなヨブの納得の仕方は、極めて理不尽であり非理性的です。人間の悪用厳禁でしょう。しかし、これが『聖書』が示す主なる神様と人間との関係です。主なる神様がわたしちとともにおられる、それだけで十分なのです。それ以外のありとあらゆる幸福は、本来の幸福ではないということです。

もちろん、堂々巡りになってしまいましたが、そのように生きる人こそ、主なる神様からこの地上において、報いを受けるはずだという考えも、『聖書』にはあります。「ヨブ記」の冒頭には、「**ウツの地にヨブという人がいた。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きていた。七人の息子と三人の娘を持ち、羊七千匹、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭の財産があり、使用人も非常に多かった。彼は東の国一番の富豪であった**」（ヨブ 1：1-3）から始まっています。非の打ち所のないほど誠実なヨブは、この地上で恵みも豊かであったのです。そして、そもそもことの発端は、「ある日、主の前に神の使いたちが集まり、サタンも来た」（ヨブ 1：6）時に、主なる神様が「お前はわたしの僕ヨブに気づいたか。地上に彼ほどの者はいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている」（ヨブ 1：8）とヨブ自慢？をしたことでした。サタンという言葉はそもそもヘブライ語ですが、「旧約聖書」において、サタンは、超自然的存在ではありますが、悪魔的存在というよりも、主なる神様に相對する、あるいは単に人間の対立相手という意味でしかありません。いずれにしても、すべては、主なる神様のサタンへのヨブ自慢？から始まったことでした。しかし、そのことが示す意味は、初めにあるのは、主なる神様が、自慢するほどヨブを大切に思っていたということです。「ヨブ記」の結びは、ヨブが失ったすべてを、それまで以上に回復するお話となっています。しかし、本来の「ヨブ記」の終わり方は、先に見た、42節5～6節で十分であろうとも言われています。ヨブは最大の幸福を得たからです。

さて、「ヨブ記」が示す、人間にとっての最大の幸福は、主なる神様に出会うこと、あるいは主なる神様が共にいて下さることであるといえます。それは、別な見方をすれば、主なる神様だけを求めることであり、それ以外を求めないことです。あるいは、主なる神様だけを恐れることが大切であり、それ以外の何ものをも恐れないことです。時折日本語の問題として、「恐れる」と「畏れる」を区分し、主なる神様に対しては、「畏れる」が大切であるといわれることもあります。『聖書』が示す主なる神様に対する「おそれ」は両方です。天地万物を創造された主なる神様を、「恐れ、畏れる」ことが大切であり、地上のありとあらゆる人物、事物、現象を「恐れ、畏れ」てはならないのが、『聖書』が示す信仰です。

なぜ、そのような話へと発展したのかと申しますと、本日の福音書、「マルコ

による福音書」4章35節から41節のお話はその「恐れ」に関わるからです。

本日の部分は、「その日の夕方になって、イエスは、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われた。そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。」からはじまります。イエス様と船に乗った弟子たちの数はわかりませんが、弟子たちの中の12人は、「使徒」と名付けられていました（マルコ 3：13-19）。そして、イエス様が語るたとえもひそかに教えられていました。彼らは、群衆たちとは異なる特別な存在として、位置づけられ、その歩みが始まったのですが、その最初のお話が本日の福音書の箇所です。そのことを象徴するかのようには、弟子たちは、イエス様とともに舟に乗って、群衆から離れます。結論を先に申しますと、そのように描かれているのですが、弟子たちは、イエス様をまったく理解していませんでした。そのことを「弟子の無理解」と表現します。この「弟子の無理解」が本格的に始まるのは、8章ぐらいからですが、ここにはすでにその端緒が見られます。

本日のお話は、夕方という時間設定以外、ガリラヤ湖を船がどれぐらい進んだかなどの説明はありません。唐突に「激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。」（マルコ 4：37）と展開します。ガリラヤ湖は、姉妹湖である琵琶湖の4分の1から3分の1ぐらいの広さの湖ですが、海拔はマイナス200メートル以上です。海拔がマイナスの湖は、死海（海拔マイナス約400メートル）が有名ですが、ガリラヤ湖もかなり低い位置にあります。それゆえ、突然、上から突風が吹くことがあるようです。暗い中ということもあり、危険な状況でしょう。そのような中で、イエス様はどうしておられるのかというと、「しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておられた」（マルコ 4：38）のです。

イエス様の時代のガリラヤ湖の船（20世紀末にほぼ完全な形のものが発掘されましたが）は、長さが8メートルぐらいの小さいものです。そんな小さな船にとって、突風が吹き、水浸しになる状況は大変です。しかし、その艫（船首）の方で枕しているイエス様の姿は、なんとも滑稽に思えます。それゆえ、弟子たちは、「イエスを起こして、『先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか』と言った。」とあります。新共同訳では「おぼれても」とありますが、この部分は「殺す、滅ぼす、壊す」という意味の動詞の受動態ですので、もう少し深刻です。新しい聖書協会共同訳では、「溺れ死んでも」と訳しました。

船に弟子が何人乗っていたかはわかりませんが、使徒として任命された12人のうち、4人は漁師です。しかも、ガリラヤ湖の漁師です。こう言ったらイエス様に申し訳ないのですが、漁師だからこそ、大工さんよりも船の状況に関して、強い危機感もったのでしょう。しかし、お話は、「イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、『黙れ。静まれ』と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった」（マルコ 4：39）とまた急展開します。そして、イエス様は、「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」（4：40）と弟子たちに教えるのでした。ここも、新共同訳では、「まだ信じないのか」となっていますが、原文は、「まだ信

仰を持たないのか」ですので、新しい聖書協会共同訳では、「まだ信仰がないのか」としました。以前の口語訳が「どうして信仰がないのか」ですから、それに近い訳です。お話の最後は弟子たちの反応です。「**彼らは恐れおののいて、互に言った、『いったい、この方はだれだろう。風も海も従わせるとは』**」(マルコ4:41)。

なんとなく納得がいかないお話です。状況は恐れて当然です。ことに、プロの漁師が四人も乗っていて、危険だと思える状況ですから、理性的な判断としては間違っていないのだと思います。しかし、弟子たちが持つべき信仰は、そのような理性による判断によるものではなく、それを超えたものです。つまり、イエス様が乗っておられれば、しかも、その方が揺れるそして濡れる船で寝ておられれば、大丈夫だと安心する信仰です。それは、無茶な話であり、またなんとも理不尽な話なのですが、イエス様に従うとは、そして、ヨブ記に見られるように主なる神様を信じるとは、そういうことだこのお話は告げています。事実、弟子たちの求めに応じて、イエス様は風も波(海)も従わせました。天地を創造された主なる神様と同じく自然にも力が及ぶのでした。

本日のお話は、弟子たちが恐れおののいて終わります。それは、そのあと弟子たちがどう歩むかという可能性を示しています。主なる神様とその神の子イエス様だけを恐れて歩む先にあるのは、地上の名誉や反映ではなく、十字架の死です。しかし、イエス様と共にいられたら、それで十分なのです。しかし、物語の弟子たちは、最後までそのような信仰を持てなかったのです。

先月のなかほどでしょうか。聖堂北壁の2階窓枠下のコンクリートが劣化のためはがれ落ちました。先週の豪雨ぐらいは大丈夫でしたが、これから台風の季節になります。すぐに建物全体が大きく壊れることはないと思いますが、教会はイエス様が共におられるので工事しなくても大丈夫とも思えません。ここでは理性的に判断し、緊急の工事をしていただくこととなり、相見積もり中です。会堂のことを含めて、わたしたちの教会の今後の歩みについては、これからも皆様と一緒に検討してしかなければなりません、今崩れては困ります。

教会の歩みであっても、わたしたち個人の歩みであっても、理性的な判断は、大切です。その意味では、ヨブの問いも、漁師である弟子たちの判断も正論です。しかし、そこにとどまっていたら、この世界のすべての出来事が、人間の思いを超えません。それは、人間が考える以上の幸福も平和も、この世界には訪れないことを意味します。本来ならば、同じ湖上で起こった次のお話(5章1節-20節)と一緒に触れた方が、そのことがより分かりやすくなるのですが、一回の説教では長くなりすぎます。

理性は大事です。しかし、主なる神様を信じるとき、恐れるとき、新しい道が発見できるのです。『聖書』が示す信仰は、その道を開きます。そうであるからこそ、人間にはもう限界だと思える状況の中でも、希望と慰めと勇気を見出すことができるのです。礼拝を通して、そのことを示す教会であり続けたいと思います。